法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-19

能界展望(平成二十四年)

小林, 健二 / Kobayashi, Kenji

(出版者 / Publisher)
The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University / 法政大学能楽研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
能楽研究 / 能楽研究
(巻 / Volume)
40
(開始ページ / Start Page)
209
(終了ページ / End Page)
219
(発行年 / Year)
2016-03-31

能界展望（平成二十四年）

小林健二

はじめに―いくつかのトピックス

大震災後の文化復興への取り組み

前年3月11日の未曾有の災害から一年が経ち、世の中は落ち着きを取り戻したかのように見えた。しかし、彼の大災害の前と後では日常の生活に大きな変化は認められないものの、人々の心の有り様に少なからぬ影響があったことは否めない。特に被災地では、如何にインフラが整備されたとしても、心に受けた傷を癒やせるはずはなく、漠然とした不安を紛らわせることもできないのである。それら精神的な痛手の救済は、宗教や芸術によってなされるものであり、人々に生きる活力をもたらすのである。そこで、多くのアーチストが被災地を訪れ、個人的な、または組織的なチャリティーのイベントを行ったが、能楽師もまた他の芸術家と同じく被災者の心の救済となる文化復興と向き合った。本展望ではまず文化復興に対する能界の取り組みから触れることにしよう。

東日本大震災の直後から、能界は被災地の文化面での復興を支えるべく活動を開始したが、平成24年も種々の取り組みがなされた。第一に取り上げるべきは「息吹の会」の活動であろう。これは、被災地での能楽の公演や普及活動の存続を目指して、観世会・金春円満井会・宝生会・金剛会・喜多流職分会・万作の会・梅若会・梅若研能会・観世九皐会・梅猶会・緑泉会・下掛宝生会・東京能楽囃子科協議会・能楽協会の諸団体が一致協力して、この年に発足した会である。実行委員会は、シテ方、三役の流儀の垣根を越えて組織され、実行委員は、柿原光博・小島英明・小寺真佐人・佐々木多門・八反田智子・水上優・山井綱雄の諸氏があたり、補佐を岡久広・國川純の両氏がつとめた。

実際の活動としては、3月7日に東京の観世能楽堂で東日本大震災復興支援能が催され、観世清和・金春安明・金剛永謹・友枝昭世・三川泉などの家元や諸流儀を代表する演者が無報酬で出演した。この東京公演での収益を基盤として、その後被災地である福島県いわき市や岩手県大船渡市でチャリティー公演が開催され、能と狂言その他が上演された。大船渡市の公演では、翌日に平泉・中尊寺白山神社能舞台で学生能楽鑑賞会が行われ、地元の平泉小学校・長島小学校から二二〇人ほどの児童が招待された。翌25年2月11日には宮城県多賀城市においても催されている。まさに流儀を越えた能界

あげての取り組みで、これらは人道的な文化活動として特筆されよう。

復興能は「息吹の会」だけではない。震災がおこった3月11日の前後には、前年に続いて第二回目の東日本大震災義捐能が、10日に福岡の大濠公園能楽堂、11日に大阪能楽会館、13日に京都観世会館の各地で行われた。京都観世会館では能楽公演の他に講演と展示も行われている。また、国立能楽堂では3月16日に企画公演〈砧〉（シテ観世清和）の上演と合わせて「復興と文化―東日本大震災から一年―」と題する記念講演会が設けられた。講師は鷲田清一で「語りきれないこと―災害からの復興と文化の力―」という題で行われたが、この「復興と文化」はこれ以降も平成26年からシリーズ化することになり、震災復興をテーマとする講演と被災地に関係する能が上演されることとなる。

【主な復興能】

◎3月7日観世能楽堂。東日本大震災復興支援能　第一部〈神歌〉（観世清和）・〈附子〉（野村万作）・〈羽衣〉（シテ武田孝史）ほか、第二部〈翁素謡〉（金春安明）・〈附子〉（石田幸雄）・〈羽衣〉（シテ岡久広）ほか。

◎3月10日大濠公園能楽堂。第二回東日本大震災義援能、〈那須与一語〉（野村万緑）・半能〈田村・長胡座〉（シテ鷹尾祥史）ほか。

◎3月11日大阪能楽会館。第二回東日本大震災義捐能、〈蝸牛〉（善竹隆司）・半能〈当麻〉（シテ大西智久）ほか。

◎3月13日京都観世会館。第二回東日本大震災義援能、第一部〈杜若・恋之舞〉（シテ大江又三郎）、第二部〈養老・水派之伝〉（シテ井上裕久）ほか。

◎8月19日いわき芸術文化交流館アリオス。息吹の会、〈仏師〉（野村万蔵）・〈田村〉（前シテ水上輝和、後シテ佐野登）。

◎9月17日大船渡市民文化会館リアスホール。息吹の会、普及公演〈柿山伏〉（石田幸雄）・半能〈高砂〉（シテ佐藤章雄）、本公演〈酢薑〉（石田幸雄）・〈羽衣〉（シテ内田成信）。

復曲〈阿古屋松〉の競演

この年も多くの新作能や復曲が上演されたが、最も注目されたのは現存する世阿弥自筆の能本で最後まで舞台化がなされなかった〈阿古屋松〉が、東西で相次いで復曲公演されたことであろう。西では、6月17日に京都観世会館でシテ片山幽雪、ワキ宝生欣哉、大鼓河村大、小鼓吉阪一郎、笛杉市和、太鼓前川光範で上演されたが、注目すべきは、それに先立って4月9日に「復曲試演の会プレ公演」として、本公演と同じ配役で研究者や報道関係者を対象に試演会を行ったことである。監修は西野春雄・味方健の二人で、世阿弥自筆本の詞章を約三分の一ほど刈り込み、後シテの塩竈明神に翁面、それも白式尉の塗装が剥げて黒式尉と見まがうばかりの黒い面をかけるなどの工夫がなされた。また、真之序之舞の途中からワキがシテの舞を継いでまうなど、演出上の工夫もなされた。間狂言は味方健の作である。

一方、東では京都でプレ公演が行われた約三週間後の4月27日・29日に、国立能楽堂において、松岡心平の監修でシテ観世清和・ワキ森常好・大鼓亀井広忠・小鼓大倉源次郎・笛藤田六郎兵衛・太鼓観世元伯により上演された。これは、世阿弥生誕六五〇年（平成25年）のプレイベントとして国立能楽堂が企画した「世阿弥自筆本による能」の掉尾をかざる催しとして位置づけられたもので、こちらは、自筆本に沿った復曲となった。公演に先立ち3月13日には、能楽特別講座「世阿弥自筆本と阿古屋松」も行われ、合わせて、展示室では松岡の監修による企画展「観世文庫展」が開催され、観世文庫に所蔵される〈阿古屋松〉を含む世阿弥自筆能本の展示もなされた。

この世阿弥自筆能本による復曲の競演は、陸奥の歌枕を舞台とすることから、期せずして前年に被災した東北地方を鎮魂する意味を持つこととなったが、工夫を加えたものと、なるべく手を加えずに復曲したものとを比較できる上で有意義な催しであったといえよう。

能楽ジャーナリズムの現状―『能楽ジャーナル』の廃刊と『花もよ』の創刊

能楽の普及を側面から支える能楽ジャーナリズム（能楽を専門に扱う雑誌や新聞）の面では、『能楽ジャーナル』が70号で休刊したことがあげられる。これについては柳沢新治氏の「発信の場が消えてゆく」（『能楽タイムズ』719号）を参照願いたいが、平成21年に『DEN』が50号で休刊したのに続いてのことで、能楽の情報を社会に発信するメディアの喪失は、能が社会の表舞台から遠退く現象としてとらえられよう。『能楽ジャーナル』は、能評・狂言評はもちろんのこと、「評談・能界展望」と題する能界の現状と問題を様々に取り上げた座談会、「地方からのメール」など地方の能界情報、「能楽師に聞く」「この人に聞きたい」の対談など小冊子ながら内容が豊富で、情報誌として貴重な媒体であった。

一方で、それにかわって能と狂言の総合誌『花もよ』が、小林わかば氏の編集により5月1日に創刊（表紙も合わせて全24頁）された。「花もよ」は「花もよい」からの命名とのことで、隔月の刊行である。その内容は、成田美名子のイラストレーション・ギャラリイ、観世清和の巻頭言、いずみ玲の能評、金子直樹の舞台随想、村尚也の能評、加賀髭のコラム、森田拾史郎のお宝写真館、近藤乾之助の芸談、三宅晶子の能の現代、高桑いづみの能・狂言演出の焦点、公演情報、今月のオススメと先取り情報とバラエティにとんでいるが、三宅の「能の現代①テクスト論的能の解釈学」や、高桑「能・狂言　演出の焦点①「棒縛」または流行歌の謡い方」の研究的な連載もあり、読み応えがある。

また、11月刊行の第4号には付録に観世寿夫の〈邯鄲〉の貴重録音（52分CD付）が付けられて評判をよんだ。これは寿夫師がロンドン大学のオニール教授の依頼をうけて、昭和32、33年頃、30代の前半に録音したもので、昭和34年にアメリカ

でのみ発売されたLPレコードをデジタル化したものである。この後、『花もよ』では音源資料を次々と世に出して評判を得ることとなる。

現在では、能楽の情報を発信する紙媒体は、この『花もよ』と『能楽タイムズ』の二誌になってしまった。新たなメディアとしてブログやツイッターなどSNSの台頭があろうが、このような能楽ジャーナリズムの変貌は、能界にも種々の影響をおよぼすことになろう。

外国の物語を素材とした新作能

この年も新作能の上演が相次いだが、目立ったのが海外の素材を用いた新作能である。

3月6日、立教大学タッカーホールで〈聖パウロの回心〉が上演された。台本の制作は国文学者で作家の林望があたり、演出はシテもつとめた観世清和、アイ狂言は野村萬斎がつとめた。立教大学が百三十八年前に米国聖公会の宣教師により開かれた「聖パウロ学校」に始まることから、作者である林は聖パウロの回心(新しい信仰に目覚めること)をテーマにしたという。キリスト教徒を迫害し、盲目となったパウロがイエスの使徒の手で開眼し、キリスト教に帰依するという内容で、一年前の東日本大震災で亡くなった方の鎮魂と再生の祈りも込められている。

4月6日、梅若能楽会館で新作〈ポトマック桜〉がシテ津村禮次郎、ツレ伊藤嘉章で上演された。作者は上田邦義で「尾崎行雄とエイブラハム・リンカーンの夢」の副題が付されるように、尾崎行雄が東京市長だった一九一二年、日露戦争の講和に尽力した米国に感謝して桜の苗木三千本を贈ったが、これが今もポトマック河畔に咲き誇り名物となっているポトマック桜のルーツであり、今年がその百周年にあたるので、記念とすべく新作されたものである。

〈ジャンヌ・ダルク〉が西野春雄により新作され、5月5日にフランスのオルレアン、7日にパリ、9日にエクサンプロバンスで、シテ狩野琇鵬により上演された。作曲・演出・考案は狩野琇鵬と山本東次郎。ジャンヌ・ダルク率いるフランス軍がオルレアン市を解放したことを記念して、毎年5月7・8日に「ジャンヌ・ダルク祭り」があり、この年が生誕六百年に当たることから新作上演されたものである。

8月21日、国立能楽堂で新作〈散尊(サムソン)〉がシテ辰巳満次郎で上演された。青山学院大学文学部英米文学科が主催し、日本ミルトン協会の共催で行われた『第十回国際ミルトン・シンポジウム記念行事』として上演されたものである。イギリスの詩人ミルトンの詩劇『闘士サムソン』をもとに作られたもので、作詞は詩人の高橋睦郎、演出・節付はシテの辰巳満次郎があたった。

10月22日、国立能楽堂で新作能〈骨の夢〉がシテ浅見慈一で上演された。早稲田大学国際教養学術院大学教授関根勝がイエーツの戯曲を翻案したもの。原作はアイルランドを舞台に英国支配の原因となった不倫の恋人達の魂がさまよう物語で

あるのを、沖縄の島津支配に置き換えて結構されている。

以上、目に付いたものを上げたが他にもあるかも知れない。能の形式、特に夢幻能は簡潔で完成された形式であることから、特定される人物と場所さえあれば、時間や空間を問わずに新作が可能である。したがって題材は無限で、海外にまで広がっていくこととなる。新作はまだまだ続きそうである。

【記念公演・特別公演】

◎セルリアンタワー能楽堂開場十周年記念特別公演―宝生流―

2月4日、〈乱、膝行〉（シテ武田孝史）・〈二人袴〉（山本東次郎）・〈石橋、連獅子〉（宝生和英）ほか。

◎虎明没後三百五十年忌狂言大蔵会

2月5日国立能楽堂。〈居杭〉（大蔵彌太郎）・〈通圓〉（善竹十郎）ほか。

◎神遊十五周年記念四十二回公演

2月26日国立能楽堂。〈木曽願書〉（シテ観世喜正）・〈那須与一〉（野村万作）・〈船弁慶、重キ前後替など〉（シテ観世喜正）。

◎日中友好四十周年記念白翔会

3月18日国立能楽堂。〈邯鄲〉（シテ坂井音晴）・〈末広〉（山本則俊）・〈石橋　十二段ノ式〉（シテ坂井音重）。

◎セルリアンタワー能楽堂開場十周年記念特別公演―金剛流―

3月20日、〈内外詣〉（シテ、金剛永謹）・〈縄綯〉（茂山千五郎）・〈土蜘蛛〉（手嶋三千春）ほか。

◎石川県立能楽堂・四十周年記念能

10月6日石川県立能楽堂。〈翁素謡〉（宝生英和）・〈末広かり〉（野村祐丞）・〈七人猩々〉ほか。

◎ブリテン生誕百年を前に―原作とオペラの日英連続公演―能〈隅田川〉・教会オペラ「カーリュー・リバー」

10月28日東京芸術大学奏楽堂。〈隅田川〉（シテ関根知孝、ワキ宝生閑）・オペラ〈鈴木准テノール、福島明也バリトン〉。9月に「カーリュー・リバー」初演の地、イギリスのオーフォード教会で、英国人の演出・美術・指揮による日英のコラボレーションで上演した舞台の凱旋公演。

【復曲・新作など】

◎復曲能〈経盛〉

2月4日大槻能楽堂。自主公演能、天野文雄監修。（シテ多久島利之・ワキ福王茂十郎）。淡路島を舞台に、平敦盛の父経盛と母の二人が熊谷直実の使者から我が子の戦死を告げられ、直実の書状と敦盛の形見を送られる。

◎新作狂言〈信楽たぬきの変身〉

2月10日日野町町民会館わたむきホール虹　大ホール・12日東近江市てんびんの里文化学習センター。おうみ狂言図鑑。藤井組作、茂山あきら演出。茂山正邦出演。

◎新作能〈ルター〉

2月17日国際日本文化研究センター内講堂。上村敏文作、（シテ上田公威）日文研・伝統文化芸術総合研究プロジェクト公演会　国際日本文化研究センター主催、監修大倉源次郎。数年後に完成を目指す試演会として位置づけられた公演。

◎新作能〈五輪書―武蔵伝〉

2月18日熊本県益城町文化会館。演出・出演、喜多流の狩野琇鵬、原作は大江捷也。二天一流を極めた武蔵が幾多の戦いの末、無明の闇の中で自問自答し、岩戸観音の導きで人としてのあるべき姿を悟る。（シテ狩野琇鵬）他に塩津哲生・香川靖嗣ほか。

◎復曲能〈常陸帯〉

7月26日国立能楽堂。企画公演『復曲・再演の夕べ』（シテ浅見真州）節付・演出、浅見真州。能本作成、西野春雄。鹿島神宮の縁結びの神事を題材とした能で、祝祭の雰囲気賑やかに、鹿島明神の神威の下、歌の書かれた帯を介して男女が巡り会うという内容。平成23年10月に鹿島神宮で初演されたものの再演。

◎新作狂言〈はだかの殿様〉

8月4日・5日日生劇場。こどものためのおもしろ狂言。松本薫作、演出。茂山正邦出演。アンデルセンの「はだかの王様」による新作。

◎新作能〈ひめゆりの乙女達〉

8月5日紀尾井ホール（小ホール）。宮西ナオ子作、（シテ足立禮子）演出、足立禮子。舞台装飾・横井紅炎（草月流）。

◎新作能〈素兎（しろうさぎ）〉

8月8日箱根神社。箱根薪能、（シテ桜間右陣）古事記一三〇〇年記念公演新作能　櫻間右陣作。節付・型付も右陣。

◎新作狂言〈警備員の悩み〉

9月23日先斗町歌舞練場。茂山狂言HANAGATA。土田英生作。茂山茂演出・出演。

◎新作狂言〈是非に及ばず〉

9月23日先斗町歌舞練場。茂山狂言HANAGATA。土田英生作。茂山宗彦演出・出演。

◎新作狂言〈鯉山の話〉

9月23日先斗町歌舞練場。茂山狂言HANAGATA。ごまのはえ作。茂山逸平演出・出演。

◎新作狂言〈伝統は絶えた〉

9月23日先斗町歌舞練場。茂山狂言HANAGATA。ごまのはえ作。茂山正邦演出・出演。

◎新作狂言〈犬の目〉

10月28日大江能楽堂。春蝶・逸平の一緒に遊びまSHOW!。茂山逸平作・演出・出演。落語の「犬の目」よりの新作。

◎新作能〈沙院〉

11月7日札幌市教育文化会館。『能の会』札幌公演、（シテ永島忠侈）作・演出は永島忠侈。江戸前期、青森の十三湊から北海道（蝦夷）に渡った円空とおぼしき行脚僧が土地の人に話をたずねると、アイヌの酋長シャクシャインについて語る。中入り後に、酋長の幽霊があらわれ当時の戦いとその思想を

述べ、舞働く。
◎新作能〈出雲〉
11月8日出雲大社。出雲簪舞台、（シテ桜間右陣）古事記一三〇〇年記念公演新作能。櫻間右陣作。節付・型付も右陣。
◎新作狂言〈食道楽〉
11月14日・23日国立能楽堂。万作を観る会。野村万作作。万作演出・出演。北大路魯山人「春夏秋冬料理天国」所収狂言「食道楽」による新作。
◎新作狂言〈ひめあらそい〉
12月21日京都府立文化芸術会館。HANAGATA 12°。茂山逸平作・演出。茂山童司出演。能〈葵上〉による新作。
◎新作狂言〈BLACK&WHITE〉
12月22日京都府立文化芸術会館。HANAGATA 12°。茂山童司作・演出。シテはなく、茂山逸平、童司、正邦、片岡孝太郎の出演。歌舞伎十八番「鳴神」による新作。
◎新作狂言〈手元にあるこの三本の線を辿るとその先にあるのは貴方か蔵か仏壇かそれともここはいったいどこなんだ〉
12月23日京都府立文化芸術会館。HANAGATA 12°。茂山童司作・演出。茂山逸平出演。落語の「たちぎれ線香」よりの新作。
◎新作狂言〈鬼来迎〉
12月23日千葉県文化会館小ホール・12月24日千葉県東総文化会館。小笠原匡作。小笠原匡演出・出演。創作狂言と称す。
◎新作狂言〈ラーメン忠臣蔵―メンマの逆襲―〉
12月28日パルテノン多摩小ホール。大蔵流茂山狂言笑いの座。茂山童司作。茂山童司演出・出演。

【海外公演】
◎日印国交樹立六〇周年記念「観世流能公演」
8月24・27日　インドのニューデリーとバンガロール　〈羽衣和合之舞〉（シテ観世清和）・〈羽衣和合之舞〉（シテ観世芳伸）。
◎ブリテン生誕百年を前に―原作とオペラの日英連続公演―能〈隅田川〉・教会オペラ「カーリュー・リバー」
9月7・9日　ロンドン　クライストチャーチ・スピルタルフィールズ、　サフォーク州オーフォード　聖バーソロミュー教会（初演の地）、（シテ関根知孝・ワキ殿田謙吉）。

【講座・展覧会など】
◎国際シンポジウム「ACTING―演じるということ」
1月27日～29日、早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム。「アルベール・カーン博物館所蔵　能・京舞映像記録上映」にて百年前の最古の能映像〈小鍛冶〉〈望月〉〈橋弁慶〉〈羽衣〉〈隅田川〉を上映。シテ金剛謹之輔など。
◎特別企画、観世文庫創立二〇周年記念「観世文庫展」平成23年12月より24年4月29日、国立能楽堂。松岡心平の監修。観世文庫蔵の世阿弥自筆能本「布留」「難波梅」「松浦佐用姫」「阿古屋松」をはじめとして観世宗家伝来の能楽資料が展示された。

◎特別講演「観世流江戸期謡本の世界」、特別展示「観世流江戸期版本」
3月13日・16日。京都観世会館、講演者は味方健。大震災の復興を記念した講演と展示。
◎開館三十周年記念『岩倉具視の能楽再興を支えた人物(ブレーン)―久米邦武と能楽展』
6月2日～7月22日、久米美術館。
久米邦武の原稿類を中心に、明治の能楽復興運動と能楽研究についての展示。
◎能楽特別講座「世阿弥自筆本と阿古屋松」
3月13日、国立能楽堂。平清水公宣(萬松寺住職)・菊地仁(山形大学教授)・松岡心平(東京大学教授)。
◎大倉集古館　特別展「観世宗家の至宝」
4月1日～6月3日。世阿弥自筆『花伝第六花修』『花伝第七別紙口伝』をはじめ、観世流宗家伝来の能面・能装束・古文書などを展示。
◎金沢能楽美術館「新・古能面展Ⅲ」
9月8日～30日。加賀宝生に伝えられる江戸時代までに作られた古面と、全国から募集した現代能面美術展〈公募〉の優秀作を展示。
◎能のかたち―NIPPON　美の玉手箱
9月15日～11月11日、福岡市立博物館。
第一部能面と能装束、第二部彩色の下・面の裏、第三部能と人々の三部からなり、一六九面におよぶ能・狂言面を展示するなど見応えのある特別展。二七〇頁にわたる図録も充実している。
◎国立能楽堂特別展「加賀の能楽名品展」
9月21日～11月21日。金沢能楽美術館所蔵で佐野家伝来の能面14面と能装束、金沢市尾山神社に伝わる悪尉面や、加賀市の江沼神社の前田家藩主所縁の能面・能装束などを展示。
◎横浜能楽堂特別展「美の世阿弥　華の信光」
9月29日～平成25年1月12日。
企画公演「美の世阿弥　華の信光」(三回)にあわせて開催され、能装束研究の山口憲が制作した装束の中から、梅若玄祥・浅見真州・大槻文蔵が公演に使用するために選んだ装束が展示された。
◎11月18日　能楽研究所創立六〇周年記念シンポジウム「能の所作を考える―通底するもの・際立つもの―」
第三十八号彙報参照。
◎観阿弥生誕六八〇年・世阿弥生誕六五〇年記念「風姿花伝観世宗家展」
12月27日～翌1月21日。松屋銀座イベントスクエア
世阿弥自筆『花伝第六花修』『花伝第七別紙口伝』をはじめ、重要美術品である弥勒作の翁面や、伝来の能装束など、約一三〇点を展示。監修、観世清和・松岡心平。

【襲名・改名】
宗家預かりであった大鼓葛野流の亀井忠雄が宗家会の承諾を

得て7月より宗家を継承することとなった。

【栄誉・受賞】

◎第六十六回文化庁芸術祭賞　萬歳楽座（藤田六郎兵衛主催）

◎春の叙勲　旭日小綬章　野村万作・亀井忠雄、旭日双光章　松野恭憲

◎第五回ティファニー財団賞・伝統文化大賞　公益財団法人山本能楽堂

◎重要無形文化財保持者（人間国宝）認定　山本東次郎

認定理由「狂言の技法を高度に体現し、剛直、端正で品格を重んじる山本家の芸風を守りつつ、天性の端麗さを加えた円転滑脱な独自な境地を確立するとともに、後進の育成や能楽の振興にも尽力している。」

◎秋の叙勲　旭日双光章　武田志房・山本則俊

◎地域文化功労者　川島英治

◎文化庁芸術祭賞　野村萬斎・上田拓司

◎観世寿夫記念法政大学能楽賞　喜多流シテ方粟谷能夫・能楽研究者羽田昶

受賞理由、第三十八号彙報参照。

◎催花賞　一色町能楽保存会

受賞理由、第三十八号彙報参照。

【日本能楽会・能楽協会関係】

◎日本能楽会

【役員構成】

《会長》野村四郎

《常務理事》観世清和・金春安明・亀井保雄・金剛永謹・宝生閑・柿原崇志・山本東次郎

《理事》梅若玄祥・浅見真州・武田孝史・豊島三千春・喜多六平太・粟谷能夫・高安勝久・藤田六郎兵衛・観世新九郎・荒木賀光・金春國和・茂山千五郎・三宅右近

《監事》小林与志郎・櫻間金記

◎追加認定（総合認定）者33名

シテ方―遠田修・柴田稔・中所信夫・下平克宏・鷹尾維教・浅井通昭・藤波重彦・小田切康陽・伊藤嘉章・馬野正基・藤谷音弥（弥は旧字）・奥川恒治・鷹尾章弘・味方玄・上田大介・浦田保親・分林道治・大西礼久・片山伸吾・山中一馬・粟谷充雄・粟谷浩之・狩野了一・友枝雄人・内田成信・金子敬一郎、ワキ方―宝生欣哉、小鼓方―横山幸彦・吉阪一郎・鵜澤洋太郎、大鼓方―辻雅之・谷口正壽、狂言方―佐藤融

【会員数】481名

◎能楽協会

【役員構成】

《理事長》野村萬

《副理事長》福王茂十郎・観世銕之丞

《専務理事》本田光洋

《常務理事》香川靖嗣・武田宗和

《理事》浅井文義・一噌隆之・井上裕久・上田貴弘・大倉源次郎・大坪喜美雄・金井雄資・観世元伯・観世喜正・國川純・善竹十郎・種田道一・辻井八郎・寺井榮・中村邦生・成田達志・廣田幸稔・前田晴啓・森常好・山本章弘

《監事》大塚和成・中村元彦・大和滋

《顧問》観世清和・金剛永謹

【会員数】（平成24年度末）総数1、296名

シテ　観世444　金春109　宝生212　金剛84　喜多46　小計895

ワキ　高安15　福王16　宝生25　小計56

笛　一噌11　森田47　藤田4　小計62

小鼓　幸31　幸清10　大倉17　観世7　小計65

大鼓　葛野12　高安11　大倉11　石井11　観世2　小計47

太鼓　観世16　金春22　小計38

狂言　大藏75　和泉58　小計133

【物故者】

●西山松之助

近世文化史、家元制度の研究者。東京教育大学名誉教授。1月7日、老衰のため逝去。享年99。明治45年、兵庫県で生まれる。東京文理大学卒。東京高師教授、東京教育大学助教授をへて昭和39年同大学教授。昭和51年成城大学教授。専攻は近世文化史。江戸町人研究会を主宰、芸能の家元制度の研究で知られた。東京都文化賞などを受賞。主な著作に『家元の研究』『江戸ッ子』『江戸庶民の四季』『ある文人歴史家の軌跡』など。

●渡邊容之助

シテ方宝生流。4月2日、胆嚢管癌により逝去。享年80。

●秋元実

平成17年より公益社団法人能楽協会監事。5月23日、心不全により逝去。享年79。

●横道萬里雄

能楽研究者、東京芸術大学名誉教授、東京文化財研究所名誉研究員。6月20日、肺炎のため逝去。享年95。大正5年、東京に生まれる。東京帝国大学文学部卒業。東京国立文化財研究所芸能部を経て、東京芸術大学教授、沖縄県立芸術大学付属研究所教授を歴任。著作に日本古典文学大系『謡曲集』『能楽の研究』など。芸術選奨文部大臣賞、紫綬褒章、日本演劇学会河竹賞、伝統文化ポーラ賞特別賞、田辺尚雄賞、法政大学能楽賞などを受賞。文化功労者。東洋音楽学会会長、楽劇学会会長などをつとめる。独自の明晰な理論で戦後の能楽研究を牽引した。能の創作にもつとめ、「鷹の泉」「山室山」「鷹姫」を新作している。

●北村治

小鼓方大倉流、人間国宝。7月31日、多臓器不全により逝去。享年75。昭和11年、東京に生まれる。大倉流小鼓方の北村一郎の長男。父に師事。昭和22年〈吉野天人〉にて初舞台。昭和32年〈道成寺〉、昭和55年〈関寺小町〉、昭和60年〈檜垣〉を初演した。観世寿夫、観世栄夫、観世静夫（のちの8世観世銕之

丞）らとともに能界の革新運動を目指した華の会の同人。堅実で秀麗な芸風で知られた。

●種田道雄

シテ方金剛流。8月17日、肝臓癌のため逝去。享年88。大正13年に生まれる。種田嘉一の次男。父および初世金剛巌、二世金剛巌に師事。初舞台は昭和6年の〈鞍馬天狗〉花見。平成8年、勲五等双光旭日章。平成14年京都市文化功労者。日本能楽会員。金剛会理事や日本能楽協会理事を歴任。

●福井良治

小鼓方幸清流。9月3日、心不全により逝去。享年58。

●山本孝

大鼓方大倉流。10月9日、肝細胞癌にて逝去、享年76。昭和11年生まれ。父である山本敬一郎および亀井俊雄に師事。三老女をはじめとするほとんどの曲を披曲し、復曲にも積極的に参加するなど、関西の囃子方をリードする存在であった。平成19年、旭日双光章受章。大阪文化祭奨励賞、大阪府民劇場奨励賞、大阪文化祭賞、法政大学能楽賞、日本芸術院賞などを受賞。